資料1

古墳壁画保存活用検討会保存技術WG（第6回）
H21. 10. 21

古墳壁画保存活用検討会保存技術ワーキンググループ（第５回）議事要旨

１．日時　　平成２１年７月２９日（水）１３：３０～１５：３４
２．場所　　文部科学省東館３Ｆ１特別会議室
３．出席者　（委員）
石﨑座長、高妻副座長、今津、川野邊、北野、肥塚、佐野、玉田、深澤の各委員
（文化庁）
松村文化財鑑査官、栗原古墳壁画室長、串田記念物課長、井上古墳壁画室長補佐、鬼原主任文化財調査官、禰宜田主任調査官、建石古墳壁画対策調査官　ほか関係官
４．概要

（１）議事
①キトラ古墳の今後の保存・活用について
事務局より資料２に基づき、キトラ古墳の今後の保存・活用について説明を行い、以下の質疑応答があった。

壁画関係
１．壁画の保存管理の方法・場所
（１）当面の保存管理　について
石﨑座長：現状で特に問題は起きていないと考える。本ワーキンググループとしては、引き続き現状を維持するという考えでよいのではないか。

（２）将来的な保存管理　について
玉田委員：壁画を取り外すことが決まったときに、将来的には戻すという前提で取り外した。その話はまだ生きていると思うが、壁画の現状を見ると、果たして戻して保存できるということは担保できないのではないか。「将来的に」というのがどのくらいの時間幅なのかにもよるが、少なくとも近々の将来については、案２の「当面の間、石室外の適切な施設で保存管理」でいくしかないと思う。
石﨑座長：本ワーキンググループとしては、当面の間ということであれば、案２の「当面の間、石室外の適切な施設で保存管理」という考えでよいのではないか。

２．壁画の公開活用
（１）当面の公開活用　について
石﨑座長：現状で特に問題は起きていないと考える。本ワーキンググループとしては、引き続き予定の公開を実施するという考えでよいのではないか。

（２）将来的な公開活用　について
石﨑座長：先ほどの「１（２）将来的な保存管理」とかなり関連してくることだと思う。
玉田委員：先ほどと同様だと思う。

石﨑座長：確かに１（２）のメリット、デメリットとほぼ同様である。
肥塚委員：案２の「当面の間、石室外の適切な施設で保存管理しながら公開」でいう「石室外の適切な施設で」という文言については、当面の間、「博物館等の適切な施設で」ということであれば非常に分かりやすいが、この「石室外の適切な施設」というのはどのような意味か。
串田記念物課長：この点については、実際どのような場所で保存管理していくのがよいのか、まだ明確になっていない部分もあると思う。「博物館」という例示が必ずしも適切かは分からないが、博物館環境下で保存していくことは必要と考えている。それを実際にどのような施設に保存していくのかということについては、まだ議論が必要かと思うため、「石室外の適切な施設」という表現を用いた。
今津委員：「適切な施設で」というのは「博物館環境で」と読み取るということか。
串田記念物課長：そう考えている。これは今後、検討会や本ワーキンググループで十分議論していただく必要があると思っている。まずはキトラ古墳壁画を保存管理していくにあたり、どのような条件が必要なのかといったことについて十分ご議論いただく必要があろうかと思う。
肥塚委員：案１の「古墳現地に貼り戻して保存管理しながら公開」については、今の技術で、これが実現出来るのかどうか疑問。過去の事例として、高湿度下にある壁画を剥ぎ取り、後にそれを戻した事例があるのか。仮にそのような事例があったとしてそれが上手くいった場合があるのか。ご存知の方がいれば教えて欲しい。私も色々調べているが、教会など地下の環境ではない事例を別にすれば、聞いたことはない。日本のような高湿度下の環境において、当面あるいは近い将来の対策として案１をいつまでも議論するのは意味がないと思う。現実に出来ることをしっかり議論するべきだと思う。
高妻副座長：奈良大学の西山教授が実施したレバノンでの事例、関西大学の吹田教授が実施したエジプトでの事例などは、一度取り外した壁画を戻した事例と言える。いずれも乾燥した環境での事例であり、日本の古墳壁画の参考になるかどうかは分からない。
今津委員：今の２つは、いずれも乾燥して極めて安定した条件ということが確認されている中で実施された事例。私も、原則論としては取り外した壁画を現地に戻すことを排除しない考えであるが、そのときには博物館環境を維持できるということが前提と考える。しかし、博物館環境をあの土の中で維持することは技術的に非常に難しい面があると思う。このワーキンググループでは、保存活用検討会が判断できるように、色々な条件や情報を出していくことが重要。
石﨑座長：先ほどのエジプトの事例に少し補足を加えたい。前回の日本文化財科学会でこの事例に関する環境データの報告があった。年間を通して、湿度が55％±７％の範囲に入っていたと記憶している。まさにそういう面でいえば、この事例は博物館環境に準ずる環境にある状況だとも言える。
今津委員：私もその調査に参加して、実際石室内にも入っている。約3,500年の間、ほぼ同じ環境であり、したがって色も残っているのだろう。しかし、その古墳・壁画が20世紀当初に発見され、今、再修理をしようとしているが、発見された当時の写真とは壁画の状態は大きく違う。環境としては長期にわたってはよいが、ある時期に短期間水が入ったなどの理由で壁画が急激に劣

化することもある。自然環境の中では、例えば大災害の雨が降るとか、そういうことも想定した上で施設を考えておかないと、一瞬水が入るだけでも大変なことになる場合がある。それを考えると、現地に戻して保存するということは、何年という単位ではよいかもしれないが、何十年、百年という単位ではなかなか難しいと思う。

深澤委員：キトラ古墳壁画の場合、歪んでしまったものを取り外したが、これを現地に戻すことを前提として行う保存処理と、恒久的に博物館等で保存や展示をしていくことを前提として行う保存処理では、処理の方法等は違うのか。あるいは、一度歪んだものを再び現地に戻して保存することは出来るのか。もしそれが無理なのであれば、案１の「古墳現地に戻して保存管理しながら公開」という選択は基本的になくなると思う。

川野邊委員：今の段階では現地に貼り戻すことを前提とした処置は行っていない。剥ぎ取った壁画は非常に薄いものなので、石室の環境が博物館環境になってさえいれば、ただ貼り戻すだけなら技術的には可能だと思う。ただし、天井については非常に強い処置をしないといけなくなる。今の処置ではとても貼り戻せないと思う。

石﨑座長：今までの意見をまとめると、本ワーキンググループとしては、当面の間ということであれば、案２の「当面の間、石室外の適切な施設で保存管理」ということになると思う。

３．壁画の保存処理

（１）壁画の取り外し　について

石﨑座長：現状で特に問題は起きていないと考える。本ワーキンググループとしては、引き続き現状を維持するという考えでよいのではないか。

（２）取り外した壁画の仮保存処置　について

課題１　泥に転写された十二支「午」の将来的な処置方針・方法　について

石﨑座長：前回のワーキンググループでは、案３のように「当面の間。状態を観察しながら現状を維持」して、将来いろいろな方法を検討して対処しようということであった。

今津委員：案３に尽きると思う。今は、壁画の取り外し作業と、取り外した壁画・漆喰を安定的に処置している段階。その後の再構成の話の中では、非常に難しい不安定な状態のものも、同じように再構成をしていくための技術を開発していく必要があるが､そのときに課題になってくる話である。そういう面では時間的にはまだ余裕があるし、方法論が確立されていないことでもあるので、少し時間をかけ余裕を持って確実な技術の開発をしていくことが重要だと思う。直近の問題ではないと思う。

玉田委員：技術開発を待つということだが、その場合、図像を反転させるにしても、絵だけを反転させるのではなくて、午像や寅像等には下書きの刻線が逆に出っ張って残っている部分があり、それに関する情報なども保存できるような技術を開発してもらえたらと思う。

佐野委員：私も現段階では案３になるだろうと思うが、書類としてこの資料２のバランスを見たときに、案１、案２は、実際にはメリットがあるのに書かれていない。この２つの案は技術的には不可能だからということでメリットを書かないという書類でよいのか、ということを考える必要がある

と思う。例えば、案１では、図像を正視出来るというメリットが考えられるが、そのようなメリットも資料には書いておいた方がよいと思う。メリットはあるけれども、案１、案２は技術的に出来ないだろう、ということではないか。

石﨑座長：案１のメリットとしては、今言われたように図像を正視出来るということですね。

佐野委員：案２のデメリットとして、裏絵になってしまうというのは書くべきものだと思う。

高妻副座長：今の佐野委員の意見に賛成する。その上で、案２のメリットというのは何が挙げられるだろうか。非常に厳しいような気がする。

石﨑座長：案２のメリットを言うとしたら、そういう高湿度の状態でずっと保たなくてよくなる、ということはあるかと思う。

川野邊委員：技術的には案１は、先ほどの現地に貼り戻すという案と同じくらい難しいと思う。将来的にはやはり案２の「泥を固めて保存する」になるのだと思う。程度の問題はあるが、博物館環境なら管理できるようなところを目指すしかないだろうと思う。ただ、今のところ自信を持って言えるような手法が見つかっていないので、案３でしばらくはいきたい。資料に書いてある「将来の技術開発」の「将来」は本当に近い将来の予定と考えている。

石﨑座長：本ワーキンググループとしては、当面の間は、案３という考えでよいのではないか。

課題２　泥の下に残されている可能性の高い他の十二支の扱い　について

川野邊委員：各壁面における確認済みの十二支の割付の規格性からみて、残された十二支が描かれているであろう場所はかなり予想できると思う。取り外した漆喰と泥をＸ線で見て、写ればよいが、写らなかった場合、それだけで「図像が無い」とは言えない。取り外した後、漆喰側を剥がすのか、そのままにしておくのか議論が必要となると思う。

石﨑座長：これに関しても、先ほどの午像と同じ技術開発が必要ということか。

川野邊委員：午像より難易度が高いかもしれないと考えている。泥と漆喰がより密着した状態にあるとすると、一緒の状態で安定して保存することはとても難しいと思う。絵を確認するとしたら漆喰側を外すのだろうが、そのような判断をするかどうかということ。

今津委員：今、Ｘ線透過法の話があったが、ＣＴスキャン等も含めて多角的に情報を得てから判断をすることが必要だと思う。

石﨑座長：本ワーキンググループとしては、残された十二支を取り外した場合には環境を制御しつつ、現状を維持し、将来の技術開発を待つ、という考えでよいのではないか。

（３）微生物対策　について

石﨑座長：微生物対策については、今年の３月以降、紫外線照射等の新たな方法を採用し、効果を得ているところ。引き続き現状を継続し、微生物調査を行いつつ、必要に応じて、物理的な除去の実施や新しい薬剤の使用を検討することと考えてよいのではないか。また、制御方法を変更したことにより微

生物相が変化する可能性については常に注意して、必要に応じた対応をすることと考えてよいのではないか。

（４）取り外した壁画の本格的保存処置

議論の前に、事務局より壁画の再構成に関するイメージサンプル（模型）を用いた説明があった。

課題１　漆喰等の強度の度合いをどの程度とするのか　について

深澤委員：案１～３について、それぞれに応じた処置方法の違いなどがあれば説明いただきたい。強い処置をすると将来的に再修理などしなくてよいということはあるのか。

川野邊委員：キトラ古墳壁画に限らない話だが、処置した後、一定の時間が経ったら再修理が必要になる、というのが基本的な考え方だと思う。そのときに修理技術者が簡単に文化財本体への処置に取りかかれるような修理や管理の方法をすることが重要。そういう意味では強い処置をしても再修理の必要性は変わらない。

肥塚委員　案１と案２はよく似ているとは思う。案２であっても、保管するときは平置きで保管したらよいと思う。

資料にある「必要な強化を行う」という表現は、漆喰に対する処置の話だと思うが、幅が広いようにも感じられ、分かりにくいように思う。漆喰を質感が変わるほど「ガチガチに」固めることはしないだろうし、する必要もない。そのことを確認しておきたい。

川野邊委員：案１と２は、処置としてはほとんど変わらないと思う。見た目も変わらない。完全に垂直なのは少し不安かとも思うが、基本的には垂直に置いて大丈夫な程度までは処置する。大きく言うと、案１、２はほぼ一緒で、案３は天井が逆さになるためより強い処置が必要という意味で、二分される。案３では、天井の質感が大きく変わる可能性がある。

今津委員：案１、２を大きく一つと考えて、案３は将来的にどのように展示するのかにより、むしろ２段階に分けて考えるのがよいのではないか。本当に天井を反転して戻すのか。戻すためにはどのような課題があるのかということを含めて考える必要がある。

高妻副座長：今津委員の意見の通りだと思う。この案１、案２、案３というのは、強化の度合いを言いながら、実はどのように見せるかというところに議論が引っ張られ過ぎているように思う。まずは強化の程度を二段階で考えて、どちらを選択するか考えればよい。案１、案２を別の案として残して議論するのは少し分かりにくいように思う。

石﨑座長：今の議論では、案１、案２を一緒にまとめたほうがよいのではないかということである。

川野邊委員：ここで議論すべきなのは、強化の度合いというより、活用の際に天井を逆さにするかどうかということだと思う。天井を逆さにすることは技術的には可能だが、そうすると処置の結果、天井の質感が大きく変わるかもしれない。

高妻副座長：今議論しないといけないのは、強化をどこまでするか、ということ。答えとしてはガチガチの強い処置をする必要はないだろうというところで、大体皆答えがみえているのではないか。将来的に天井を正位置に据えるということであれば、その時に検討すべきことかと思う。今津委員

が言われるように二段階で考えて、まずはこれだけの処置をしておけば十分だろうというところで留めておくのがよいと思う。

石﨑座長：課題１については、本ワーキンググループとしては、案１、２をまとめて、案３の問題点を挙げるということでよいのではないか。

課題２　再構成する範囲及び単位をどうするか　について

玉田委員：天井については屋根型に抉りがあるが、それをそのまま再現するということでよいか。

川野邊委員：その通りである。天井を平らにして再構成することは考えていない。

佐野委員：案１の場合、全体として大きくなり重くなる。本当に一面でよいのか。強化の度合いというのはある程度変わってくるものか。

川野邊委員：変わらないだろう。バッキングの問題だと思う。

深澤委員：先ほどのイメージサンプルを見て考えたことだが、案２では、実際は壁画そのものが石材で分かれたときに機械的に分離するということではないという理解でよいのか。あるいは、隠れている十二支が石材の分かれ目に載っていればそれも機械的に分離することはしない、ということで理解したい。「石材単位」というのはそういう幅のあることと考えてよいのか。

今津委員：原則として「石材単位」ということだろう。

高妻副座長：それでも天井の考え方は難しい。

今津委員：そこを議論すべきだと思う。

肥塚委員：案１のデメリットについては、各壁面の全面を一面と考えるのが基本ではあるが、再構成後の壁画のメンテナンスを考えれば、壁面ごとに全部一面として一緒に扱うというのは避けたほうがよいと思う。案２が一番妥当で修理もやりやすいし、リスクも少ない。天井天文図は歴史的にもとても重要なものであるので、少しでもよい状態で後世に伝えることができればよいと思う。修理の現場は大変だと思うが、技術的な課題をクリアしていって欲しい。ワーキンググループとしては案２がよいと思う。案３は、修理やこれからの問題を考えると、意味があまりないと思う。

川野邊委員：天井は、真中にもともと亀裂が入っているので、あそこで分けたいと考えている。展示の際には一体として並べ、一つに見えるように工夫できると思う。フォトマップ等を見れば明らかだが、壁面には手頃な大きさに大きなヒビが走っている。バッキングは自由に作れるので、例えば大きなヒビの単位で分ける等、「石材単位」を原則としながら、個々に対応する必要があると思う。その辺は適宜相談させていただきたい。

石﨑座長：個々の対応が必要ということではあるが、本ワーキンググループとしては、案２の「各壁面の全面を石材単位で再構成」という考えでよいのではないか。

課題３　漆喰がなく石が露出している部分の扱い　について

玉田委員：メリット、デメリットで挙げられている「絵画としての真正性」というところがよく分からない。欠けた部分を復元することによって真正性が失われるという考えなのか。考古資料等では日常的に行っていることだと思うし、復元したところが分かるようにする手立てはあると思うがい

かがか。

建石調査官：欠けた部分のうちどこを埋めたということが分かるような方法が案２、埋めた部分を分からないようにして、言い方は悪いが「作る」ような方法が案１。案２とひと言で言っても、実際にはさまざまなバリエーションがあると思う。

今津委員：これについては美術史的な視点を持って、もう少し議論をすればよいと思う。今はまだ部分部分を取り上げている段階であるので、あまり詳細な議論をする必要はない。真正性を大事にしながら進めるという基本的な考え方を確認し、もう少し先に詰めた議論をしていくということでよいのではないか。

石崎座長：本ワーキンググループとしてはそのような考え方でよいのではないか。

課題４　「朱雀」の裏面の泥に転写された朱線・墨線の処置をどうするのか　について

石崎座長：これは対応案として、転写された部分についても裏打ちして再構成を行うということだと思う。

課題５　クリーニングの度合いをどの程度とするのか　について

佐野委員：案３は、泥を完全に除去するという意味合いを含めた表現だと思うが、当然ある程度表面上に乗ったものが収縮して、悪影響がありそうなものは、多分クリーニングの過程で除去されていくだろう。そのような理解でよいか。

川野邊委員：案３は、泥をきれいに除去して漆喰層を完全に見せるということ。

肥塚委員：クリーニングとひと言で言ってもとても難しい課題がある。キトラ古墳壁画ではなく高松塚古墳壁画の話だが、漆喰の表層に薄いカルサイトの膜が形成されている部分がある。これを見て、壁画発見当初、フレスコ技法で描かれたと間違って判断されたこともあったが、これは壁画が描かれた後、土中環境の中で形成されたものである。この薄いカルサイト層が壁画表面の顔料層を守った可能性は高いと考えられる。表面をクリーニングしなければいけないと言うことで、このような部分を無理にさわることは、逆に危険かもしれない。慎重に検討するべきであろう。クリーニングはいつでもできるが、一度失われたものは二度と戻らない。

今津委員：案２は技術的に可能な範囲で安全にカビ、ゲル、泥等を除去するような表現とし、案３は完全に泥を除去するがその際にはいろいろな意味で危険があるという表現とし、案２を少し幅広く考えておいたらよいのではないか。その中で技術的に融通がきくようにしておく方が、現場もやりやすいのではないかと思う。

石崎座長：今津委員の意見のように、少し幅を持たせた書き方の方がよいように思う。

古墳関係

１．古墳の整備・活用

（１）石室の扱い　について

今津委員：案１の「石室を保存管理し、公開する」と案２の「石室を保存管理し壁画の複製品を貼り付けた上で公開する」はどのような違いがあるのか。案１と案２の違いは、壁画の複製品をそこに取りつけるか取りつけないかというふうに理解すればよいのか。余り選択肢を多くするのも分かりにくいと思う。つまり、石室を公開するのかしないのかということで選択肢を作った方が分かりやすいと思う。

佐野委員：今津委員の案に賛成である。案１と案２の差が分からない。その上で、案１にある「継続的な維持管理が必要となる」という項目が案２にはない理由も不明である。複製品であっても案２であれば継続的な維持管理は必要となるはず。案１、２を分ける意味はあまりないと思う。

玉田委員：案１、２、３で、環境を制御するための施設が必要とあるが、それは例えば現在の覆屋のような規模になるのか、それとも墓道部に入るような規模になるのか。墳丘本体の整備の話とも関わると思う。

建石調査官：どのレベルでの管理が必要なのかということと関わると思う。

肥塚委員：大きく言えば、公開するか公開しないか、ということにまずはなってくるのではないか。

深澤委員：壁画を将来的に現地に戻す、ということであれば、本来であれば、キトラ古墳そのもので環境計測をすることがふさわしいと思うが、それとは別に例えば実験用の模型のようなものを作って、その環境下でカビの生育実験等を並行して行うということになれば、キトラ古墳の石室本体に対するダメージは軽減するのではないか。様々な選択肢を検討すべきであろう。

高妻副座長：模型とは、キトラ古墳と同じような実験場を作るとか、そういう意味のことか。

深澤委員：基本的にはそういうことになる。

今津委員：今の施設では博物館環境を作り出すことは出来ない。さらに、今の施設を抜本的に改良するかどうかは分からないが、博物館環境を目指したとしても実現出来るかは分からない。今の技術では、これだけのお金を投下すれば完全な博物館環境を整えられるという自信もないと言わざるを得ない。いずれにせよ観察や実験を繰り返す必要があり、いきなり公開というのは難しいだろう。

川野邊委員：案１、２の維持管理というのは、どういうレベルで維持管理するかということで施設の規模等が決まると思う。また、博物館環境をあの中に作り出すのは、技術的に難しいという以前に、原理的にも難しいと思う。今ある開口部からだけのアクセスで環境を作り出すのは非常に難しい。墳丘は地山に続いており水の問題等も深刻だと思う。だから、あの中に遠い将来博物館環境をつくるにしても、今我々の持っている選択肢の中では、古墳の内側の空間をほとんど使ってしまうような、そういうことでもしない限りできそうもないと思っている。余り現実的ではないような気がする。

今津委員：もし博物館環境を作り出すのであれば、今の設備等の延長では難しいだろう。抜本的な改良を加えるという決断をしないと、なかなか公開までには結びつかないだろうと思う。

高妻副座長：今の施設は博物館環境をつくるために作った施設ではなく、むしろ高湿度を保つ作業前室として作ったもの。したがって、博物館環境を実現するということになれば、施設を完全に抜本的に変えないといけないのだろう。そうなったときに、あの石室そのものを実験場に使うのかという話も出

てくるので､先ほどの深澤委員の意見はありうるのではないかと思っている。
今津委員：すぐに案１、２というか、公開をしていくというのは、現実的な案としては難しかろうと思う。
玉田委員：公開、公開しないということに関わる問題だが、案４で公開しないことのデメリットとして「歴史的追体験が不可能となる」と書かれているが、これは必ずしもそうは言えないと思う。陶板で石室の模型も作るわけであるし、また、発掘調査で出土した石室石材の一部（盗掘で打ち欠かれた石材の破片を接合して復元したもの）も活用できる。これは本物の石室の一部であるが、このようなものを上手く組み合わせれば、石室そのものを公開しなくてもキトラ古墳の本物の石室のイメージを持ってもらうことは可能だと思う。
佐野委員：キトラ古墳石室の凝灰岩について、含水率と凝灰岩の強度や強化方法等の関係で、何かイメージがあれば教えてもらいたい。
肥塚委員：今まで湿った状態でもっていたのであるから、湿っている段階では大丈夫だと思う。ただ、急に環境が変わると怖い。特に変えた直後は一番怖い。現地で凝灰岩を強化できるかといえば、それは出来ないと思う。それは、空間が狭いということと、ごく限られた一面しか処置ができないので、反対側がどうなっているか全然分からず、亀裂がどのように入っているのか分からないため、それが環境変化に伴って構造的に弱ってくる可能性もあると思う。したがって、石室を公開したら安全面でも危険を伴うと考える。
石﨑座長：今までの意見から考えると、案２というのは特に上げなくてもよいのではないかと思う。公開するということで、案２は案１に含まれると考えて整理したい。
川野邊委員：案４の場合には、もう石室は見られなくしてしまうということ。ほかの九州の装飾古墳のように、石室を覗けるけれども特に何もしていないという方向は考えないということか。
建石調査官：九州などの装飾古墳でよくみる事例のイメージが案３になると思う。案４は、石室の部分は別にすると、見た目としては、今、高松塚古墳で行っている整備のイメージ。石室が現地にあるもので言えば、近隣でいうとマルコ山古墳のイメージ。

（２）墳丘本体の扱い　について
玉田委員：メリット、デメリットで、発掘調査の必要性の有無を取上げているが、これはここで挙げなくてよいのではないか。例えば案１のメリットで発掘調査は不要というのではなくて、むしろ発見当時のそういう古墳の姿をそのまま残すとか、そういった形の方がよいのではないか。
建石調査官：発掘調査をそれぞれのメリット、デメリットに入れているのは、特別史跡及びその周辺の保護という観点からのもの。
玉田委員：それであれば、それが分かるように表現した方がよいと思う。

（３）床面の扱い　について
石﨑座長：床面の扱いについては、対応状況としては、今後考古学的調査を実施するということで、前回の会議でこのような形でやっていかなくてはいけないのではないかという意見が大勢だったと思う。
深澤委員：床面の剥ぎ取りの是非というところで、棺台の痕跡については、基

本的には既に検討はなされているが、さらに精密な検討を行うという意味で考古学的な調査を行うということが対応状況の中にあると思う。これは確かにそういう視点でやればよいと思う。ただ、剥ぎ取りを行うのかどうかということと考古学的な所見というのが、要するに単純にイコールではなくて、それもあくまでも幾つかの選択、参考資料の中の一つというところでぜひ位置づけてほしいと願っているところ。

質疑応答の後、資料２を修正し、本ワーキンググループにおける技術的な検討結果として、座長から次回の古墳壁画保存活用検討会に報告することとした。

②その他

事務局より資料３に基づき、キトラ古墳壁画の複製について説明を行い、以下の質疑応答があった。

玉田委員：陶板複製では、床面は作らないのか。床面には壁画はないが重要な考古学的情報が確認されており、重要と考える。予算の問題もあるとは思うが、ぜひ床面の複製も検討されたい。

串田記念物課長：陶板複製については、今年度予算に計上している。床面についても、対応できるようであれば対応していきたい。

次回のワーキンググループは古墳壁画保存活用検討会における議論を踏まえて開催されることが確認され、第５回ワーキンググループは終了した。

以　上